

タイ文化との関わりを通し見つめる、世界の中の日本人としてのあり方

前バンコク日本人学校 教諭

栃木県鹿沼市立菊沢東小学校 教諭 福田 康 英

キーワード：国際交流, 国際理解, 海外での教育, バンコク

1. はじめに

日本から、タイに行く。また、タイから日本に行ってみると、文化の違いに驚かされる。驚かされるがこれは当たり前前のことである。日本国内でも、隣の県との間にも、隣の家との間にもあるかもしれない。近ければ近いほどその違いは小さいから特に意識することもない。しかし、遠く離れると文化が大きく異なってくる。

我々は日本から派遣され、日本とは文化の異なる国で生活した。職場と家の往復だけを考えると、その文化に触れることなく1日を送ろうと思えば容易である。しかし、これからの時代は「世界」という視点で物事を見ること大切になってくる。学校教育においても、国際教育に関する時間が多く取られるようになってきている。子どもたちに国際感覚を身につけさせたいならば、まずは自分が異文化に入っていくようにしなければいけない。ここでは数々の出会いを通して見たこと、体験したことから、感じ、考えたことをまとめた。

2. 生活している中で感じたタイ文化

(1) 「サヌック」と「マイペンライ」

「サヌック（楽しい）」「マイペンライ（問題ない・気にしない）」の精神が国民に浸透しており、非常に人なつこい。そのような人柄に触発されてか、私も全く知らない人に対してあいさつすることも多くなった。日本でも同じ調子であいさつしている状況である。

「マイペンライ」を強く感じたこととしては、赴任した当初、ソンクランという旧正月を祝う水掛け祭りがあった。エアコンなしで窓全開のバスに乗り移動していると、道の脇にはバケツを持った人たちがいた。と、いきなりバスに向かって水を掛け始めた。バスに乗っていた私の子ども二人は、ずぶ濡れになり、あまりにも突然のことに硬直していた。

アパートでも守衛さん達が水掛けを楽しんでいた。大音量でCDをかけ、昼間から酒を飲んでいた。タイで一番暑い季節の中だったが、様子があまりに楽しそうだったため、私の子どもたちも混ぜてもらった。楽しさに拍車のかかった我が子は、こともあろうにCDプレイヤーに水をかけてしまった。もちろんCDプレイヤーは動かなくなった。「申し訳ないことをしてしまった」「タイではかなり高価な物なのではないだろうか」といろいろ心配していると、「マイペンライ」と笑って許してくれた。「こちらを気遣ってくれているのだ。かえって申し訳ない。」という気持ちでいっぱいになった。しかし、水掛けはまだ続く。

道を通る2人乗りしたバイクに守衛さんが水をかけたときだった。水の勢いに押されたのか、スリップしたのか、バイクがもの見事に転倒してしまった。日本だったら、「保険だ」「保証だ」「警察だ」と大騒ぎになる瞬間である。乗車している人達にけががなかったのも幸いだったが、私は聞いた。「マイペンライ」。しかも、水を掛けた方が言ったのを確かに聞いた。

時と場合によって、「マイペンライ」では済まないこともあるだろうから、一概にこれがよいとは言えないが、このおおらかさは日本人としても多少見習うところはありそうだ。自動車のハンドルも、「遊び」があることで安全を保っているように、心のゆとりをもっていないと、どこかで行き詰まりかねない。

(2) 子どもを大切にす文化

タイ文化は子どもを非常に大切にす文化である。子どもを連れて町を歩くと、人の視線をよく感じる。毎秒感じるといってもいいほどだ。そして、多くの人が関わりをもとうとする。名前を聞いたり、年を聞いたり。バイクタクシーの運転手も必ずちょっかいを出してくる。

私は自家用車を所有していないのでバスや電車を利用する機会が多かった。子どもを連れて歩いていると、タイ人は必ず席を子どもに譲ってくれる。「必ず」というのは「多く」ということではなく「必ず」である。これには驚き、恐縮してしまう気持ちである。しかも、1人立つというのではなく、自主的に1人以上立つ。あまりに自然な感じである。席に座っている人が気付かないと、周りの立っている人が「子どもが来たんだから譲ってあげな。」とでもいうように促してくれる。促された人は当たり前前に席を立つ。先日高校生くらいの子達が譲ってくれた。日本であまり感じることでできない良さといえる。

車掌さんも子どもが好きで妻の抱く0歳児にちょっかいを出していた。

私の長男がバスで眠ってしまい、隣の人にもたれかかった。顔を埋め、よだれも付いたかもしれない。「すみません」というと、「マイペンライ」である。そしてその人は、たくさんの荷物を持つ私の代わりに、眠った長男を抱っこしてバスを降りてくれた。もちろんこのような人ばかりではないと思うが、それにしてもとても子ども好きである。日本では自家用車を所有していたため、公共交通機関の利用機会が少なかったのもあるが、それにしてもあまりに違いすぎる。これは日本文化も学ぶべき大きな点だ。皆が堂々と譲る姿には格好の良さも感じてしまったほどだ。

(3) 家族を大切に思ふ文化

「恋しい」この言葉を知っている。知っているが使ったことはない。日本人にとって、知っているが、あまり口から出したことのない単語ではないだろうか。守衛さんと話したときに、「離婚したから、娘になかなか会えない。キットウン（恋しい）。」と言っていた。また、私の妻が出産のため一時帰国した際に「キットウンだね。」と私に話しかけた。

日本人なら「寂しい」というが、タイ人は「キットウン」という。この言葉は、日本では恋人などに対してよく使われるように思う。しかし、タイ人は誰に対してでも使うようだ。それだけ人との関わり、特に家族との関わりを大切にしているということだろう。

3. タイに住む子どもたちとの学習を通して感じたこと

(1) カセサート校との交流学習会

①バンコク日本人学校にて

タイの現地校訪問でも感じたが、タイ語を話すと、タイ人との距離が一気に縮まる。これは逆の立場でもいえる。外国人が日本語を話したらとても感動する。親近感を覚えるというものである。クラスに来たタイ人子どもに「何でタイ語が話せるの。」などと聞かれ、非常に興味をもってもらったのはそんなところからかもしれない。

交流学習会では、我々教員との交流ではなく、子どもたち同士での交流である。けん玉作り、けん玉遊びや、日本の昔遊びでは、言葉よりも一緒にやってみる、実際にやってみるという活動により子どもたちは心を通わせていたように思う。相手に興味をもって関わろうとする姿勢が心の壁を破り、近づくきっかけになることは間違いない。

②カセサート大学附属小学校にて

2年に1度日本人学校が主催校となり、カセサート校を招く。相手校主催の活動を見ることができたわけだが、驚きの連続だった。

例えば遊びコーナーでは、景品を大盤振る舞いする。我々の感覚からすると、「みんなが平等に」という点にとて

も気を遣う。しかし、それはなく、景品があるときにある分だけそこにいる子にあげる様子があった。また、日本人の感覚に「活動中にお菓子を食べながら」はない。もしお菓子を食べるなら、決まった時間に一斉にお菓子タイムを取る。しかし、今回お菓子タイムはない。完全に自由であった。活動はとても楽しく、子どもたちは静かに歩いてなど移動しない。走る。そこで危なかったのは、棒付きの飴をくわえたまま走り回っている子がいたことだ。転んでのどに刺さっては大変と、肝を冷やした。

お弁当を食べるときに日本人なら「いただきます。」で始まるが、タイの学校は何となく始まるということもあった。

様々な違いに驚いたこともあったが、よほど危ないことは別として、相手校のすることにいちいち驚くのではなくお任せすることも大切だと思った。

これらの違いは国民性の違いだから仕方がない。いや、違っていい。その違いを見に行っているのだ。何でもかんでも自分たちのいいようにしては相手校の良さ、異文化の学校と交流を持つ良さが消えてしまう。違いを責めるのではなく、受け入れる姿勢が大切だ。「郷に入っては郷に従え」である。それを学びに来たのである。

(2) プーケット補習校訪問

バンコク日本人学校にいる二重国籍の子と同様、二重国籍の児童が在籍している。しかし、ここに通う児童は、普段現地の学校やインターナショナルスクールに通い、土日だけ日本語を学ぶために来ている。授業の開始と共に児童がそろろうということもなければ、おしゃべりをせずに学習が進むということもない。いかにして興味をもたせ、教師の計画することをさせるかが大きなポイントだった。読み聞かせて導入したり、15分パーツで授業を作ったりと、気持ちを落ち着けて学習を進めることができるように授業を組んだ。

授業で大切にすることは、せっかくなので日本文化にたっぷり浸らせたいということだ。そのため、読み聞かせは、日本でもかなり有名な「ももたろう」「うらしまたろう」「きんたろう」を選んだ。それらには歌もあり、子どもたちは飽きることもなく集中して聞いていた。

日本語を話す活動としては、「かっぱ（谷川俊太郎）」の音読を行った。リズムカルな作品で子どもたちに好評だった。また、そのリズムの中であって、一見見失ってしまいそうな言葉は、1つ1つ解説することで、言葉への理解と文章の解釈につながり効果的だった。

文化の違い、教育の違いによって、プーケット補習校の二重国籍の児童と、日本人学校の二重国籍の児童、同じハーフの子とはいっても、教育によってその成長が大きく違ってくることを感じるとともに、教育の大切さを再認識した。

二重国籍の児童は、今でこそ年に何度も日本に行く機会を得ているかもしれないが、補習校での休み時間に、子どもたちの間でタイ語によるコミュニケーションが多くあった様子などから考えると、将来日本を離れ、日本語から離れて生きていくことも十分ありうる。孫の代には全く日本の陰もないかもしれない。中学生にして日本語が不十分な生徒は、高校でもあえて日本語を選ばずそのまま日本語を忘れ去ってしまうのだろう。そう考えるととても切ない気持ちになる。しかし、これは逆の立場からも言えることだ。どちらかをいずれ選ぶということは私にとって大きな選択といえる。目の前の子どもたちがそのような選択をいつかするのかと思うと何とも不思議な気持ちをした。

(3) 現地校での授業を通して（バーンポングナムローン校・サハサートスクサー校・国民党の学校）

自由に子ども達と交流することがねらいとなった。しかし、狭いグラウンには、手作りのサッカーゴール・壊れたバスケットゴールがあるだけで、交流をするような道具はほとんどなかった。そこで、教員は交流（一緒に遊ぶ）ためのボールや縄跳びなどの道具をすべて持って行った。交流で使った道具については、そのまま学校に寄付した。

また、学校へ募品もした。とくに以下の物が不足しているようだった。

ボール、ノート（特にタイ製の表紙が厚手の物）、レポート用紙、ロケット鉛筆、色鉛筆、赤鉛筆・青鉛筆、ボールペン、クレヨン・クレパス、絵の具、スケッチブック（A4サイズ）

歯ブラシが村全体で不足していて、一家に1本しかないそうなので、旅行代金の一部で子ども達全員に1人1本歯ブラシを購入して寄付した。

担当学年は低学年であったが、我々教員が多くいたため、全員に目が届いた。支援を十分にすることができ、紙飛行機作りはスムーズにいった。紙飛行機が飛ぶ様子を、子どもたちはキラキラした目で見つめていた。紙飛行機のよさは、作品が残ることだ。くしゃくしゃになり、飛行機が飛ばなくても、作り方は分かる。作り方が分かれば、いつでもどこでも作れるという形で技術や文化が継承できるという点が素晴らしい。

「日本人」という存在自体が珍しく、我々と活動を共にするというのが、この学校の今回の目的。我々は授業をしないということで、一瞬戸惑ったが、今回の活動は国際理解の大切な基礎の部分であったと振り返る。遊びから学ぶことは多い。自分が子どもだった頃、「外国人」というだけで尻込みしていたことがあった。この学校の子どもたちは、積極的に関わりをもとうとし、楽しみを見いだしていた。今回のことから、海外に目が向き、世界で活躍する子が出るかもしれない。そう思うと、とても貴重な時間であったことが再認識させられた。

活動を通して、自分の成長を感じたのは「タイ語力」だ。もちろん、頑張っても発音は本場のものとは違うようで、児童に助けてもらったこともしばしばだったが、クラス写真撮影の時に「列を作ってください。」「3列です。」「1列10人です。」というような説明をすることができた。3年間の状況を振り返ると、確かに言いたいことが言えるようになったと思う。何度も口に出したことで必要な単語を覚えることにも慣れてきた自分に気付いた。

学校の様子で驚いたのは立場の違いだ。校舎に入るとき、教師は土足、子どもたちは靴を脱ぐ。日本人の感覚としては、同じように教室に入るのだから、同じように靴を脱ぐべきだと思ったが、タイにおける「教師」という職は尊敬される別格の存在のようで、そのために靴は脱がないようだ。1時間目は体育だったので、少し離れた運動場まで移動した。その際、ランニングでの移動となったが、教師だけは、自転車での移動だった。そこからも、タイにおける「教師」という存在の大きさを感じた。

国民党の学校では、最初の教室はちゃぶ台のような机を3～4人程度で使い、地べたに座っていた。ちゃぶ台は壊れていて、天板と足が分離しており、煉瓦を積んで足にするような使い方をしている物もあった。次の教室では、机と椅子で学習していた。この違いがなぜ起こるのか聞くことはできなかったが、同じ学年の児童にこれほど違う処遇で臨むというのも驚いた。

4. おわりに

海外で生活することになろうとは、今まで考えたこともなかった。今回の赴任をきっかけに自分の中の世界観ががらっと変わった。異文化というからには、異なることは多い。しかし、自分の文化より素晴らしいと思えるところをたくさん発見できた。文化に対して、自分の文化をかたくなに守るということも大切であるが、よいものは取り入れることで今までの文化が成り立ってきた。そう考えると、現代を生きる我々もそうしていきたいし、他の文化に対して寛容な心をもっていきたい。

様々な文化を見ると、人の数だけ文化があることに気付かされる。少しずつ、自分の考えと違う考えに触れたときも、いきなり反対するのではなく相手の意見を咀嚼して考えられるようになっていく。相手に自分を理解してもらうことを要求するだけでなく、そうしてほしいならまず自分が理解できる柔軟な人になっていきたい。